

私はよく博物館に一人で行く。これは一人でないのだ。なぜならば博物館での私の密かな楽しみは、展示物の前に立ち尽くしひたすらに想像を膨らませることだからだ。

例えばマンモスの頭の骨の展示を見るとき、私はマンモスを狩る立場の人間になることを想像する。木々に身を隠し、その巨体に恐怖し、槍を持つ手に汗が滲む。恐怖に飲み込まれそうになったところで誰かが関の声を上げたのを聞いて一斉に襲いかかる。近づくとほど大きく見えるマンモスが、こちらをジロリと睨むのを見ながらも足は止めない。あの牙に刺されたら、あの足で踏みつけられたら……そんな恐怖を体験するのだ。

森の展示があればその森の中を歩くことを想像するし、恐竜の化石を見ればそれに襲われたときのことを想像する。普通に考えて怖かったり不安になったりする想像でしかないのに、いつからかそんなことをして楽しむようになった。怖いという適度な刺激が心地よいからだろうか。あるいはふと我に返ったとき安全な場所にいることを自覚してホッとするからだろうか。自分でも理由はよくわからないが、誰にも言わない密かな楽しみの一つになっていることは確かだった。

今日は水族館に来てみた。趣向を変えるため、というよりむしろ久しぶりに来てみたかったからというのが大きい。子供の頃はよく親に

連れられて来ていたが、意外と自分一人では行かないものだ。何年ぶりだろうか。目の前の家族連れを見ながらぼんやりとそんなことを考える。

特に何が見たいと決めて来ているわけではないので、人の流れに合わせてゆっくり歩みを進める。十メートルくらいの通路を抜けてスペースに入ると、小水槽がずらりと並んでいた。そのうち一番近いものを覗き込むと、どこかで見たことがあるような小さく鮮やかな熱帯魚がひらひらと泳いでいた。変わった楽しみ方もする私だが、こうして綺麗な魚が泳いでいるのを見るのも普通に好きだ。

水槽は円形の空間の壁と、中心の太い柱とに埋め込まれるようにして置いてある。私はそれら一つ一つをなめ回すように見る。子供の頃はなんとなく人混みに流されてじっくり見られなかったからだろうか、何一つ見逃すまいとでも思っているかのように見入ってしまう。当時は魚にばかり気をとられていたが、今見ると岩やサンゴといった装飾にも魚を映えさせる工夫が見えて感心する。

順路に従って歩みを進めると、どうやら違うテーマの空間に出たようだ。水槽のぼんやりした明かりと通路を表す足下の小さな明かりがなく、暗い印象を受ける。ふと目をやると、身体に見合わないほど長い脚を尊大に動かすカニが見えた。タラバガニだ。確かタラバガニはカニではなくヤドカリだったな、と思いながらここが深海スペースであることを理解する。

どこか不気味ながら不思議な魅力を持ち合わせる深海生物たちに思

わず見入る。ずんぐりとしたメンダコや、大きなダンゴムシみたいなグソクムシも見つけた。テレビで何度も見たことはあったが、こうして本当に生きている様を見るとなんだか急に変な生き物に見えてくる。

そんな生き物を見ていると、深海の様子を想像してしまう。冷たく厚い海水に覆われ、日の光が届かない深海。目が見えない魚たちは地を這うようにして砂から有機物を探し出す。どこかにいるであろう捕食者の存在を知ってか知らずか、ただ黙々と砂をひっくり返して進む。

と、そんな想像をしていると、子供の泣き声で一気に現実を引き戻された。母親がどうにかなだめようとしているのが見える。確かに小さい子供にはこの暗い雰囲気と異様に見える生き物はちよつと怖いかもしれない。そう思いながらも、泣きじゃくる子供の声にいたたまれなくなつて私はそそくさと次のコーナーに向かった。

次のスペースには円形の通路から、ぐるりと一繋がりになっている水槽があった。その奥には上面も水槽になっているアーチ状の空間が続いているのが見えた。私はしばらく立ちっぱなしで疲れたのもあつて、中央にある背もたれのない柔らかい椅子に腰掛けた。

ふうと息をつく。隣の椅子にはカップルがいて、何やらあれこれ指さしながら時たま小さく笑う様子が聞こえる。私はゆつくりと意識を目の前の水槽に向ける。大型の魚や小型の魚の群れがせわしなく行き交っているのを見て、ここが外洋コーナーだと察する。

大型の魚が突っ込んできて小魚の群れが散り、数秒もしないうちに元に戻る様子をじっと見る。彼らはこの水槽という逃げ場のない空間

に閉じ込められてストレスにならないのだろうか。そういえば適度なストレスがある方が長生きするんだっただか。エサが十分与えられているならそうそう食べられる心配もないだろうし、まあ大丈夫か。

しばらく見ていて、私はふと視界の左端に群れからはぐれたらしき小魚を見つけた。これだけ小さい水槽ならすぐ仲間を見つけれられるだろう。そう思っていると、先ほど群れを散らしていた大型の魚がゆらりと近づき、バクリとその小魚を一口に捕食した。一瞬あつげにとられた後、ちらつと周りを見ると、気付いているのは私を含め数人くらいの方だった。

滅多にないことに遭遇したなという冷静な思考と、当たり前のようの一つの命が一瞬にして失われたことへの動揺が入り交じる。だが、きつとこれこそが野生の日常なのだ。そう考えることで驚きに折り合いをつける。気持ちが落ち着くと、自然と食べられる側の魚に想像が向いていく。小指の先くらい稚魚の期間を生き延び、何年も成長を続け、そしてあるとき食べられる。一瞬の恐怖と、痛みと、その後を訪れる死という無。酷くあつさり、死ぬ。

ふとさつきの子供のことを思い出す。あの子は怖くて不安になつて泣いてしまったのだ。アクリル板を隔ててすら自分が安全だと思えなくて、目の前の光景を恐れる。きつとあの子はここにいる誰よりもあの深海魚たちを間近に鮮明に感じていたのだろう。そう思うと私はなんだか悔しくなつて、椅子から立ち上がり、深海コーナーに足を向けた。